

茂山千五郎家

Kyogen

狂言



鎌腹



舟船



猫也月



茂山千五郎



茂山宗彦



茂山茂



松本薫



銘木実



山下守久



お豆腐狂言



茂山千五郎家

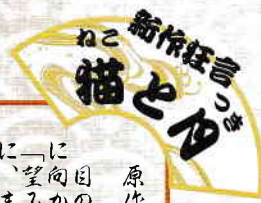
SHIGEYAMA OTOFU KYOGEN

茂山千五郎家では「お豆腐のような狂言師」という言葉が語り伝えられています。その言葉は、十世正重（二世千作）への悪口に由来しております。

正重は、気軽に狂言を楽しんで頂こうと、色々なところに出向いては、余興に狂言を上演しておりました。室町時代に「武家式楽」と位置づけられて以降、能と狂言は武士や公家など特別階級の文化でありました。明治時代でもまだ、能舞台以外での上演はいけない、他のジャンルの芸能と共演してはいけないなど、保守的な考え方が根強かったころ、タブーを犯して活動する正重は「あいつはどこにでも気軽に出て行く、お豆腐のような奴だ」と言われていました。「茂山の狂言は我々のやっている特別な芸能文化ではなく、どこの家の食卓にも上がる豆腐のような安い奴らや」という意味の悪口を言われたのです。

しかし正重は「お豆腐で結構。それ自体高価でも上等でもないが、味つけによって高級な味にもなれば、庶民の味にもなる。お豆腐のようにどんな所でも喜んでいただける狂言を演じればよい。より美味しいお豆腐になることに努力すればよい」と、その悪口を逆手にとりました。

いつの世も、どなたからも広く愛される、飽きのこない、そして味わい深い。そんな「お豆腐狂言」をお楽しみください。



急げ者の夫と働き者の女房との壮絶な夫婦喧嘩から、この狂言は始まります。今日は近所の顔役が仲裁に入り、ながら夫婦が登壇します。しかし、今日は近所の後指をさして笑っている。今後は夫婦喧嘩をしても二度と仲裁には入らないから仲良くするようにと忠告して、顔役は帰っていきませう。その後、夫は女房の言い付けて、やむなく山へ木を切り出せば、いそこは男は打ち殺された。同じ死ぬ命なら、男らしく自ら命を絶とうとします。しかし根が臆病な夫は、死ぬ方法を色々工夫しますが、なかなか死にきることができません。現代にも通じる世界です。死なな男とわすしい女房、亭主を罵るがとても愛している。現代にも

原作 W・B・エイツ 訳 佐野哲郎 演出 松本薫
目の見えない物乞いが足の悪い物乞いを背負い、聖コルマンの象に向かっています。聖なる象に到着すると、本当に聖コルマンの象に望みは何かという聖者に、目の見えない物乞いは目が見えるように願いが叶った二人は、祝福を受けることを願います。それぞれのアイルランドの国民的詩人ノーベル文学賞作家のW・B・エイツが15年初演、2017年にはイエイツの母国アイルランドでも上演されました。

主人と太郎冠者が巫宮へ遊びに行く途中、神崎川にさしかかります。そこで太郎冠者は遠くに見える「舟」を呼ぼうと「ふなや」と呼びます。しかし主人は、「舟」は「ふな」ではなく「ふね」だと言っています。お互い古歌を引いてきて、「舟」を「ふね」と呼ぶのか「ふな」と呼ぶのかで口論となります。最後に主人は「ふね」と謙う謙の一節を思い出すが、小名ながらも軽妙な味わいの感じられる作品です。

2022年 旭川市民劇場 9月例会

9月5日(月) 午後6:30
6日(火) 午後1:30

会場 / 旭川市公会堂

上演時間 1時間45分 (休憩15分含む)

旭川市民劇場 旭川市3条通8丁目緑橋ビル1号館2F

TEL 0166-23-1655

入会のご案内	
入会金	2,000円
会費(月)	一般 2,500円
	大学生 1,000円
	中高生 500円
会員になると年6回の演劇を鑑賞できます。 詳しくは旭川市民劇場まで	

次例会のご案内

2022年10月例会
青年劇場

『きみはいくさに征ったけれど』
作/大西弘記
出演/島野仲代 中川為久朗
10月12日(水)午後6:30
13日(木)午後1:30
会場/旭川市公会堂